OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

第３章

外国人旅行者のための Henro Walk Networkの可能性

水野　康一

1．はじめに

ここ数年，四国霊場八十八箇所巡り（四国遍路）[1]がブームとなっているようである。明石海峡大橋の開通により四国への交通アクセスが格段に良くなったことにより，関西や中部地方から，パッケージツアーやチャーターバスなどで四国遍路に出かける団体が増えている。特に今年（2008年）は閏年であり，通常とは逆回りに霊場をめぐる「逆打ち」でより大きな功徳が得られるという言い伝えから，旅行会社の企画する逆打ちツアーも人気のようである。

このようなバスや自動車による遍路に比べれば，まだ割合としては小さいが，いわゆる「歩き遍路」という，主として（あるいはすべて）徒歩で1,200キロ以上の四国巡礼を行うお遍路さんが増えているらしい。

[1]「遍路」について，その意味はしばしば曖昧に用いられるが，本稿では「霊場を巡礼すること（=pilgrimage）およびその道のり（＝passage）」を「遍路」，「巡礼者（=pilgrim）」を「お遍路さん」と呼ぶ。ただし，「外国人遍路」は例外として「外国人のお遍路さん」の意味で用いる。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

歩き遍路は，四国ではごく日常的な風景の一部となっているが，近年，歩き遍路をテーマにした映画やドラマが相次いで全国公開され，また多くの歩き遍路情報がメディアや出版物を通して入手できるようになり，一種の「歩き遍路ブーム」のようである。

先日四国地方でローカル放送されたNHKの遍路特集の番組[2]によると，四国の歩き遍路は5,000人とも言われており，とりわけ若者の歩き遍路が目立って増えているという。そのような歩き遍路をする人々の中に，最近外国人の姿をたまに見かけるようになった。昨年３月，香川大学経済学部で行われたツーリズムシンポジウムでにおいて，ディビッド・モートン氏（徳島文理大学客員講師）の「外国人から見た四国遍路の旅」と題された講演があったが，彼によると1999年頃から外国人遍路の数が増えはじめ，現在も海外から四国遍路についての問い合わせのメールが数多く彼のもとへ寄せられているとのことである。

筆者は昨年，本書の前巻である『新しい観光の諸相』の第８章を担当し，その中で，これからの国際観光推進には「ソフトパワー」が重要で，地域が多文化共生問題に正面から取り組むことが必要である，と論じた。それ以降，その実行策として，大学生たちが地域リーダーとなって，地域住民に働きかけるというプランを自分なりに模索してきた。ちょうどその時期に聴いたモートン氏のこの講演で，言葉の壁など外国人が遍路中に出くわす問題がいくつか紹介されたが，そこから筆者はあるアイデアを得ることができた。それは，大学が持つ力，すなわち専門家の豊富な知識と経験，および学生の柔軟な思考力と旺盛な行動力と，昔から遍路に対して「お接待」文化を持っている地域住民のホスピタリティを外国人遍路へのサポートという形で上手く繋ぐことができるので

---

[2] NHK松山放送局「四国スペシャル『心で歩く1200キロ』～2008年の遍路たち～」2008年３月７日放送

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

はないかということである。

こうして，大学と地域が連携して外国人遍路ないし外国人旅行者をサポートするためのプロジェクトを構想するにあたり、本稿ではこれを便宜的に「Henro Walk Network」（仮称）と呼び，その概要を紹介する。

なお，誤解を避けるために予め断っておくが，本プロジェクトは構想であり，現時点でまだ実体の存在するものではない。しかしながら，このプロジェクト構想を具体化し，実行段階に移すには，やはり事前に実現可能性について吟味する必要がある。本論ではその第一段階の作業として，外国人遍路が抱える問題の所在とその解決にあたるためのボランティア組織のあり方について，インターネット情報を中心とした文献調査により検討する。

2．外国人遍路の状況

四国のお遍路さんは年間15万人以上で，前述のようにそのうち5,000人が歩き遍路であると言われている。それでははたして外国人遍路の数はどれほどなのだろうか。前述のモートン氏の講演によると，香川県さぬき市の「おへんろ交流サロン」に残された記帳から，2001年から2004年までの４年間に192人の外国人遍路が同館を訪れており，その人数は増加傾向にあるらしい。その国籍は，ヨーロッパからアジアまで多岐にわたるが（17カ国），主としてアメリカ，カナダ，ドイツ，オーストリアと欧米人が多い[3]。おへんろ交流サロンは四国遍路最後の88番札所の手前に位置しており，すべての外国人遍路が四国一周をするわけではないため，実際の外国人遍路の数はさらにもっと多いと考えられる。

欧米など個人主義の強い文化を持つ外国人は，団体旅行に参加するこ

[3] デイビッド・モートン「外国人から見た四国遍路の旅」『遍路と巡礼地四国』（第３回香川大学経済学部ツーリズム・シンポジウム講演資料集）

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

とは少なく，また日本人に比べてまとまった休暇を取りやすいので，彼らはほとんどの場合，単独あるいは少人数で，徒歩や自転車，あるいは列車や路線バスを利用しながらゆっくりと四国遍路を行っていると考えられる。欧米人は日本の自然や歴史のある文化財に関心が高いとされ，四国遍路の持つ神秘性と独自性[4]に惹かれるのであろう。四国遍路では弘法大師への信仰のもとに，誰もが同じお遍路さんとして，宗派や宗教，さらには国籍や人種さえ問われないということ，また，すべての札所を巡り，納経帳にその記録を残すという目に見える達成目標が設定されているため，宗教や文化の異なる外国人にも参加しやすさがある。

かなり以前から，外国で出版される日本観光ガイドブックは，四国のセクションで必ず「88 Temples (Sacred Places) in Shikoku」を紹介してきた。このためか，日本を訪れる外国人に四国について聞いてみると，四国遍路のことを知っている人がかなり多いことがわかる。ところが，実際にガイドブックの記述を読んでみると，四国遍路（四国八十八箇所霊場）の概要や歴史の紹介に終わっている場合が多く，このことはLonely PlanetやThe Rough Guideなどといった一人歩き用のガイドブックでも例外ではない。紙数の制限によるものであろうが，実際に遍路を歩いてみようと考える旅行者には，これでは全く情報不足という感は否めない。ただ出版社側にも自覚があるようで，最近の版では，外国人向けの遍路情報を提供するウェブサイトのURLが掲載されており，読者にはそちらを参照するように薦めている。

現在はインターネットにさえアクセスできれば，印刷媒体の旅行ガイドブックは不要なほど，ネット上には旅行情報があふれている。四国遍

---

[4] 横山（2006）は，世界の多くの宗教巡礼が目的地である聖地（点）を目指す旅であるのに対して四国遍路は霊場（点）を結ぶ遍路道（線）で何かを見つけようとする終わりのない「世界唯一の円環型巡拝の旅」であるとしている。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

路を希望する外国人が重宝しそうな情報も，今では全てネット上にあるといっても過言ではないほどである。特に個人のサイトやブログで紹介されている四国遍路体験の記録やこういった外国人遍路の「先達」のアドバイスは情報量に富み，おそらく多くの外国人遍路がこのようなサイトを利用しているはずである。これらの中から，外国人遍路の状況をうかがい知ることができる考える資料として，以下に6つを紹介する。

「Echoes of Incense[5]」

アメリカ人Don Weiss氏による個人サイトで，前述の外国人向けガイドブックにもURLが紹介されている。このサイトでは，彼が徳島に在住していた1993年当時の四国遍路体験をオンラインで読むことができる。仏教や四国遍路の文化や歴史への関心の高さが伺える紀行文である。

「A Brief Shikoku Pilgrimage "English" Guide[6]」

ハワイ在住のJeffrey Hacker氏による四国遍路ガイドで，1996年に上記のWeiss氏のサイトで公開されている。タイトルはやや控えめであるが，遍路の準備から歩き方まで，さまざまなアドバイスが提供されている。

「Pilgrimage to the 88 Sacred Places of Shikoku[7]」

シカゴ在住のDavid Turkington氏による四国遍路に関する総合情報サイトである。同氏は，1999年に四国遍路を徒歩で通し打ちした後，

---

[5] http://echoes.bluemandala.com/
[6] http://echoes.bluemandala.com/jhguide.html
[7] http://www.shikokuhenrotrail.com/

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

2005年以降毎年来日し，一県ずつ区切り打ちを行っている。サイトには彼自身の膨大な遍路日誌と関連データが掲載されているだけでなく，前述のモートン氏のほか，多くの遍路体験者が情報や記事を寄せており，外国人向けとしては，現時点において最も包括的で詳細な情報提供サイトとなっている。

「HENRO Guide[8]」

フランス人のAlain Thierion氏による四国遍路ガイドである。定番のガイドブックを使った宿泊予約のとり方や，風呂の入り方など，宿での行動を写真入りで丁寧に解説している。四国遍路はもちろんのこと，日本語や日本事情をほとんど知らない外国人旅行者のために，初心者を意識した記述が見られるのが特長である。

「Visiting the 88 temples in Shikoku Island, Japan[9]」

アメリカ人のJames Knighten氏が，四国遍路での異文化体験をユーモアたっぷりに描写した日誌である。筆者を含めて多くの日本人が気づきにくいことが，外国人の目にはよく見えていることを改めて知らされる。この点で，四国遍路を志す外国人たちだけでなく，迎え入れるホスト側にとっても貴重な情報源となりうる。

「Gaijin Henro[10]」

ニュージーランドのEleanor Lefever氏の四国遍路体験記である。日本語を全く知らない彼女は，言葉の壁や習慣の違いに苦労しながらも，

---

8 http://henro.free.fr/
9 http://www.jknighten.com/Henro/
10 http://www.gaijinhenro.blogspot.com/

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

様々な人の出会いに助けられ，何とか四国遍路をやり遂げる。事細かなできごとに反応する彼女の心の動きがよく描かれており，文学作品と言ってよいほど読みごたえのあるエッセイである。彼女が遍路中に感じていたストレスは，まさに異文化との目に見えない衝突によるもの（危機事例）であり，外国人に対するホスピタリティについて考えさせられる良い教材でもある。

3．外国人遍路たちが抱える問題

上で取り上げたような外国人遍路による指南サイトや体験記の情報をもとに，とりわけ外国人が四国遍路をする際に困難（問題）と感じることは何かについて，以下に考察していく。

（1）言葉の壁

都会を旅行するのとは異なり，四国遍路の場合，周りは日本語ばかりで，英語を理解する人がきわめて少ないと考えてよい。前掲の体験記で，Lefever氏は日本語の文字を「hieroglyphic（象形文字）」と揶揄しているが，このような場合，情報を得るには誰か英語がわかる人を探し出してその人に頼るしかない。その場合，もし誤った情報を与えられても，誤りに気づくのには長い時間を要してしまうことになり，彼女もそういった失敗を実際に経験している[11]。Turikington氏らの充実した外国語の遍路情報サイトのおかげで，言語の壁による情報不足はかなり解消

[11] 前述のLefever氏の体験記によると，彼女が高野山で買った納経帳が四国霊場のものではないことに22番札所を過ぎた所で気づき，結局88箇所目を終えた（結願した）後，残りの墨書朱印を集めるために，最初の22箇所を再度回ることになった。そもそも原因は，高野山で納経所を買わせた参拝客の勘違いであった。売り場に簡単な英語で商品説明がしてあれば，このような間違いを犯すことがなかったかもしれない。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

されつつあるが[12]，日本語の日常会話に困らないような人でも，現場でのちょっとしたミスコミュニケーションに大きな代償を払わされることもあるために注意を要する。

（2）外国人が必要とする情報の不足

前項の言語の壁に原因がある場合が多いと思われるが，とりわけ外国人遍路が必要としてる情報が不足しがちであるということである。具体例を既出のサイトから拾ってみると，まず一番多いのが宿に関する情報（ソフト面，ハード面）である。スタッフの外国人に対する接客態度，英語を話せるスタッフの有無，食事メニューの柔軟性，トイレや風呂の形式（洋式トイレ，個別風呂があるかどうか）などが外国人には関心事のようである。このほか，大きなサイズの靴や服を扱う店，外国為替を扱う銀行など，普通の日本人は気にもかけない（ゆえに集められていない）情報が求められことがある。

（3）遍路にかかる出費

Lefever氏の四国遍路体験記によると，彼女は当初徒歩のみの遍路であったが，途中からバスや列車を利用するようになった。彼女はその理由について，準備してきた旅行資金が不足し始め，宿泊数を減らすためだと説明している。確かによく考えれば，歩き遍路には多額の資金が必要である。本章で取り上げている遍路体験を読む限り，彼らはいずれも

[12] 徳島文理大学のデービッド・モートン氏の翻訳により，歩き遍路のバイブルとも言われる『四国遍路ひとり歩き同行二人（地図編）』（へんろみち保存協力会編）の英訳版『Shikoku Japan 88 Route Guide』が2007年10月に出版された。ポケットサイズの本に，遍路の解説や案内が必要十分に詰め込まれ，紙媒体の歩き遍路ガイドとしては，すでに決定版ともいえる良書となっている。海外のアマゾンでも入手可能になるそうで，Turkington氏のオンラインガイドと併用すればまさに「鬼に金棒」の情報源といえる。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

民宿あるいは宿坊に宿泊して遍路を続けている。二食込みの宿泊費は，いずれも6,500円前後が相場となっており，仮に結願までに50日を要するとして，宿泊費だけでも30万円以上かかることになる。昼食や納経料に加え，さらに海外からのお遍路さんは往復の航空運賃も必要となれば，全体で50万円以上の出費を覚悟しなければならない。貯蓄の少ない若年層の旅行者の場合，これだけの金額を支出するのは困難である。通夜堂，善根宿など無料の宿泊所に宿泊したり，あるいはアウトドア派であれば野宿といった方法で費用をおさえることもできるかもしれないが，疲れがとれない上に，寝袋やテント等の装備を担いで歩く必要があり，かなりの気力と体力が求められる。お金を使う場合も，節約する場合も，いずれも，歩き遍路の通し打ちは出発前によほどの決心が必要となるだろう。海外からともなれば，計画段階で遍路を思いとどまってしまうのも致し方ないであろう。

4. Henro Walk Network構想

すでに述べたように，「Henro Walk Network（仮称）」は遍路中の，あるいは遍路に出る前の外国人旅行者を援助する活動を組織的に展開できないかという考えから出発したプロジェクト（現在はまだ構想段階）である。これまでに書物やネットの調査を通じて，外国人遍路や四国遍路全般について予備的リサーチを行ってきた。得られた情報や資源を最大限に利用すれば実現可能性の高い構想となるであろうが、また現実的な制約が存在しているのも事実である。ここでは，具体的な提案をする前に，まず本プロジェクトの基本的な方針について考える。

（1）必要とされている以上のサービスや情報提供を行わない

何のために遍路をするのかという目的は，人それぞれ違うであろう。時には道に迷い，困難に直面し，そこから思いがけない体験や出会いを

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

することも重要であると考えている人もおり[13]，筆者もこの考え方に同調する。過剰なサービスや情報提供を行うことによって，この四国遍路の重要なエッセンスを奪わないようにこころがける必要がある。

（2）持続可能性を重視する

昨今の四国遍路ブームで遍路道は多くのお遍路さんで賑わっているが，他方で商業主義化，遍路の自然や文化の破壊も危惧されている。ただの観光プロモーション活動ではなく，四国八十八箇所が真の世界遺産となるために，四国遍路の普遍的な価値について，国際的な視点から意見交換し，理解を深めることを目的とすべきである。

（3）地域ボランティアや関連組織と連携する

外国人遍路へのホスピタリティを通して，地域住民の異文化理解や生きがいの再発見を後押しする。四国全体をカバーするために，地域ボランティアのほか，「NPO遍路とおもてなしのネットワーク[14]」「四国八十八ヶ所ヘンロ小屋プロジェクト[15]」などの，関連性の高い既存組織

---

[13] Turkington氏は，四国遍路に出発する準備不足を心配するLefever氏に，先達として以下のようなアドバイスをメールで送っている。
“Being unprepared means absolutely nothing. You are taking the best approach in my opinion - prepare the best you can and simply not worrying about what might happen after that. This is by far the best way to approach the walk. Let each minute, hour, kilometer, day, and week simply unfold as they happen.（中略）Live each encounter fully and enjoy everything and everyone you meet to the best of your ability. I found that the true pilgrimage is not related to the temples at all. The real heart of this trip is what happens to you as you walk the trail between the temples. Unfortunately i am stupid and hard headed so didn't learn this until after my first walk. This second time around is much, much more enjoyable and meaningful because i do see that now.”（前掲E. Lefever「GAIJIN Henro」より引用）

[14] http://www.omotenashi88.net/

[15] http://uta.rgr.jp/

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

との連携を図る。

5．Henro Walk Networkの具体的活動について

以上のような基本活動方針を踏まえて，本プロジェクトがどのような形で外国人遍路をサポートすることができるのかを考察する。第3節で述べた，外国人遍路を取り巻く3つの問題，すなわち（1）言葉の壁，（2）外国人が必要とする情報の不足，（3）遍路にかかる費用について，サポートのあり方を考えていく。

（1）翻訳・通訳のサポート

外国人遍路へのの最も簡単なサポートが，看板，案内掲示板，パンフレットなどの翻訳活動である。外国人観光客の多い公共施設などでは，複数言語の案内やパンフレットを見ることがあるが，四国遍路の場合，欧米系の外国人が多いため，当面は日本語案内に英語を併記する（パンフレットであれば英語版を作成する）活動が考えられる。簡単なものについては，学生の活動とし，より複雑なものは学内の英語教員（母語話者）の協力を得ながら作業を進めるものとする。ただし，案内板等は，そのほとんどが公共物または私有財産であるので，管理者や所有者の許諾を求め，費用が発生する場合の負担については，個別に検討する必要がある。重要度の高さや着手のしやすさを考慮して進めていけばよいであろう。

通訳のサポートは，宿泊予約のサポートや，ミスコミュニケーションが許されない重要な手続きや意思決定の場面において必要であると考える。電話で対応できることもあれば，そうはいかない場合もある。言葉の正確な意味づけは，場面や文脈により決まるので，コミュニケーションの現場に立ち会わなければ，解決できないことも多いだろう。問題を抱えている外国人遍路と通訳者を直接会わせるとなると，各地域に通訳

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ボランティアが必要となる。地域の善意通訳組織（SGGクラブ）との連帯・協力が欠かせないであろう[16]。

（2）外国人のために役立つ情報の収集

情報収集については，外国人遍路から聞き取りを行う，または自ら遍路に出て実地で調査するという方法がある。問題解決方法はいたってシンプルな課題であるが，ある一定の成果をあげるには，時間と人手がかかるため，実行には学生の協力が必要になる。具体的な活動方法としては，「ニュースタート百年遍路[17]」のように，ある一定区間ごと手分けして遍路をまわり，現地で情報収集や調査を行うことが基本となるであろう。このようにして集められた情報を，インターネットを介して発信するための外国人向け遍路情報サイトを立ち上げる必要もある。

（3）遍路ホームステイのネットワーク形成

多くの外国人に四国遍路を訪れてもらうために，外国人遍路にSecurity（安全），Sanitation（衛生），Saving（節約）の「3つのS」を提供するためのホームステイネットワークの構築が本プロジェクトの目標課題である。上記（1），（2）の活動を通じて社会的な認知と信用を得た上で，外国人遍路に一夜の宿を提供するボランティアを募り，組織化したいと考えている。

不特定のお遍路さんに善根宿として紹介するのではなく，ホームステイ受け入れ側の都合を優先しながら，事務局が宿泊者の必要に応じてホームステイ先を紹介するシステムとする。遍路道保存の観点から，遍路宿などの既存のビジネスに影響を及ぼさないように，特に海外から歩

---

[16] http://www.jnto.go.jp/info/support/goodwill_guide.html
[17] http://www.new-start-jp.org/

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

き遍路に来る若者に限定するということも考えられる。その一方で，受け入れ家族は，例えば，子供が独立した後の中高年夫婦世帯などとすれば，国際間だけでなく世代間といった多文化交流を促す仕組みもできる。

本プロジェクトは，関係者（大学，学生，地域）の理解とコミットメントが得られなければ，実現不可能であり，単なる絵空事にすぎないものである。できるところから着手したい（まず自分も遍路を歩いてみることだろうか）と考えているが，今回はあくまでも構想の発表にとどめ，読者の意見を聞かせてもらいたいと考えている。

6．おわりに

筆者も学生時代に，海外でバックパックを背負ってヒッチハイク旅行をした経験がある。その時の心境を思い出しながら，今回数多くの遍路体験記を読んだ。自分自身の体験にも共通していると感じたのは，ひたすら歩きながら新たな自己発見をしたり，困難の中で，その後の人生を変えてしまうような奇跡的な体験や出会いを経験したことである。それらを遍路体験者は皆「弘法大師の導き」と表現する。筆者自身は，バックパックを下ろしてから，英語教育の世界に入り，大学の職を得てこの四国にやってきた。そして今，ツーリズムコースに関わって，四国遍路の研究者から多くのことを学ばせていただいている。今は自分も遍路に導かれているような気がしてならない。

参考文献

水野康一「香川における国際観光の可能性と課題」香川大学経済学部ツーリズム研究会編『新しい観光の諸相』（第８章），2007，pp.137-152.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

宮崎建樹著，ディビッド・モートン監修・翻訳『Shikoku Japan 88 Route Guide』武揚堂，2007

横山良一『必携！四国お遍路バイブル』集英社，2006